

## 大学生の恋愛観・結婚観に関する意識調査

疋田京子

HIKITA Kyoko

(2008年度基礎ゼミナールゼミ生)

大友まどか、馬場友紀子、森未咲、上野充知代  
谷川亜里沙、藤岡美喜、米森彩香

### 目次

はじめに

I 調査実践の背景と概要

II 調査結果とその分析

III 調査に対する考察と今後の課題

おわりに

キーワード：ジェンダー意識 大学生 恋愛観 結婚観 幸福とは

### はじめに

今年入学した学生たちが生まれ育った時期の前半の約10年は、「失われた10年」（平成不況期）にほぼ重なる。男女共同参画という視点から見れば、家族や性をめぐる価値観が激突し、「ジェンダー」という言葉の定義をめぐって「家族や性の多様性」の実現がきわめて政治的な意味をもつことを意識させられた時期でもある。そして、後半の約10年は、「性別でなく、個性」で活躍する社会を目指す男女共同参画社会基本法が1999年に制定され、「ワークライフ・バランス」や「ダイバーシティ（多様性）」という言葉が頻繁に使われるようになった。

こうした社会背景の中でアイデンティティーを形成してきた学生たちのジェンダー意識、あるいは「家族や性に関する意識」はどのように変わったのだろうか。

このような問題関心から、2008年度に私の基礎ゼミナールでは、ゼミに集った学生と、同年代の学生の恋愛観・結婚観を調査し、ゼミ生自身の理想のライフスタイルとのすり合わせをしてみることにした。本稿は、7月26日（土）に鹿児島県男女共同参画フォーラムの自主企画ワークショップ「結婚は幸福の条件か」で学生が報告をした「大学生の恋愛観・結婚観に関する意識調査」の結果をもとに、学生のジェンダー意識の変化を分析するものである。

### I 調査実践の背景と概要

#### 1. 調査実践の背景

同年代の男子学生は、どんな女性と結婚したいと思っているのだろうか——。2008年度が始まり、

大学の導入教育として商経学科（一部）が開講している基礎ゼミナールに集まった学生に、「今何が一番知りたいか。調べてみたいことは何？」とたずねたとき、この答えが返って来た。この質問の前には、短大卒業後30年くらいまでの「理想のライフコース」を報告するという課題を出していた。すると、7名のゼミ生のうち6人が25歳から30歳くらいで結婚し、子ども2人（男1人、女1人）が理想という報告をした。7人中6人がといっても、今どきの女子学生が「女の幸せは結婚」と単純に信じているとも思えない。各種の結婚に関する世論調査では、結婚は「すべきもの」から「しなくても構わない」選択肢になったと言われているが、目の前の学生にとってはどうなのか。これが、大学生の恋愛観・結婚観のアンケート調査という基礎ゼミナールの実践を行うきっかけになった疑問である。

理想のライフコースという課題は、そもそも「幸福とは何か」を問う課題だった。この問いには「周りの人と共に充実した毎日を送れること」「安定した幸福な生活」という漠然とした答えが目立った。「世界一あたたかい家庭を築く。そのために夫選びは大切」と結婚に対する思い入れの強い学生もいたが、6人の中には、結婚相手に望むこととして「絶対に暴力を振るわない」「借金がない、作らない」「太っていない」「気が長い」など、DVや幼児虐待、メタボリック、雇用不安といった社会問題を意識した具体的記述もあり、結婚に対して慎重な態度も見取れた。また、結婚はめんどろなので「一生独身でいたい」という学生も1人いて、「結婚が幸福の条件」と意識されているわけでもないようだった。

しかし、いずれにしても学生にとって結婚が人生の重大な関心事であることは確かであるため、「結婚は幸福の条件か？」を一応のテーマとして、同年代の学生、特に男子学生の恋愛観・結婚観を調査し、自分たちの理想のライフスタイルとのすり合わせを試みることにした。

## 2. 調査の概要

アンケートの質問項目を決めるにあたっては、『平成17年度国民生活白書』（内閣府）の世論調査や、立命館大学の学生が2004年度特殊講義の中で行った「大学生の恋愛観・結婚観の実態調査」<sup>1)</sup>を参考資料とした。

通常のゼミ活動の中では、学生の迷走する議論に対し、教員は適切な結論に至るよう方向付けのアドバイスをすることが求められるのかもしれないが、質問項目の決定については学生たちの意向をできるかぎり優先した。自主性を尊重するといいつながら教員がやたらにアドバイスをすると、かえってそれと反対の方向を学生が選んでしまう場合や、最後までやる意欲を失ってしまうということもあるからだ。だがそれ以上に、一貫性や論理性はなくとも、直感的にでも学生が一番知りた

<sup>1)</sup> 田島怜奈・熊本珠実・藪田奈緒子・松岡慎吾『2004年度特殊講義 大学生の恋愛観と結婚観の実態調査』（[www.ritsumei.ac.jp/ba/~mozawa/mr/2004/wedding.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/ba/~mozawa/mr/2004/wedding.pdf)）。2004年立命館大学の特殊講義の中で、学生が同大学の学生200人を対象に行ったアンケート調査の実態報告書。恋愛する場合と結婚する場合、「夢を追いかける人」と「現実を見る人」とどっちがいいかといった質問や、「恋愛相手を結婚相手としてみているか」といった質問は男女別の分析が行われていないが、恋愛相手・結婚相手に経済的安定をどのくらい求めるかといった項目では性別で分析を行っている。

がっていることは何かということに、私自身が興味があった。そのため、集計段階になって気づいた不備も何点かあったが、それは今後の課題とすることにした。

学生が実施したアンケートの質問項目は、以下のようなものである。

[大学生の恋愛観・結婚観に関する意識調査アンケート]

1. 今、付き合っている人はいますか (はい ・ いいえ)
2. 恋愛相手をいつも結婚相手としてみていますか (はい ・ いいえ)
3. 結婚したいですか (はい ・ いいえ)

⇒ 「いいえ」と答えた人にお聞きします。

それは何故ですか ( )

4. 付き合う場合と結婚する場合の理想について教えてください。

\*付き合う場合

年齢 (年下・同年・年上・問わない)

重視する条件3つ (性格, 容姿, 職業, 経済力, 価値観, 学歴)

相手の許せない習慣・許せる習慣を3つずつ

(喫煙・飲酒・浮気・金遣いが荒い・子どもが嫌い・価値観が違う・嘘をつく)

叶えたい夢は何ですか (あったら教えてください)

( )

\*結婚する場合 (「付き合う場合」と同じ質問)

5. 結婚するとしたら・・・

- (1) 結婚式は夫婦にとって重要だと思いますか (はい ・ いいえ)

理由 ( )

- (2) あなたが結婚後に望むライフスタイルは次のうちどれですか

a. 専業主婦 (夫) 型    b. 仕事継続型    c. 産休・育休後継続型

- (3) 相手に望む結婚後の理想のライフスタイルは次のうちどれですか

a. 専業主婦 (夫) 型    b. 仕事継続型    c. 産休・育休後継続型

- (4) 男は仕事, 女は家事という考え方についてどう思いますか (賛成・反対)

- (5) 結婚するまでの交際期間はどれくらいが好ましいと思いますか

( ) 年 ( ) ヶ月

6. 子どもは欲しいですか (はい ・ いいえ)

はい ⇒ 男 ( ) 人    女 ( ) 人

いいえ ⇒ それはなぜですか ( )

7. 結婚は幸福の条件だと思いますか (はい ・ いいえ)

はい ⇒ 結婚のメリットは何だと思いますか ( )

いいえ ⇒ 結婚のデメリットは何だと思いますか

調査の方法は、鹿児島県立短期大学の学生には、6月12日の「現代人権論」講義（全学科対象）の時間を利用してゼミ生が配布し、その場で記入してもらう方法で実施し、受講生108名（全て女子）から回答を得た。男子学生については、鹿児島大学の教養科目（1，2年生対象）3クラスを対象に、同様にゼミ生が配布してその場で記入してもらうという方法で実施した。160名からの回答があり、予想より女子学生の数が多く（男子77名，女子83名），単に男子学生・女子学生の比較だけでなく、県短女子と鹿児島大学女子の比較もしてみようということになった。

集計については「アンケート君」という集計ソフトを活用したが、質問項目毎の関連付けや自由記入欄の処理など煩雑を極めたため、データとして集計可能なものに限って採用し結果を分析した。

## II 調査結果とその分析

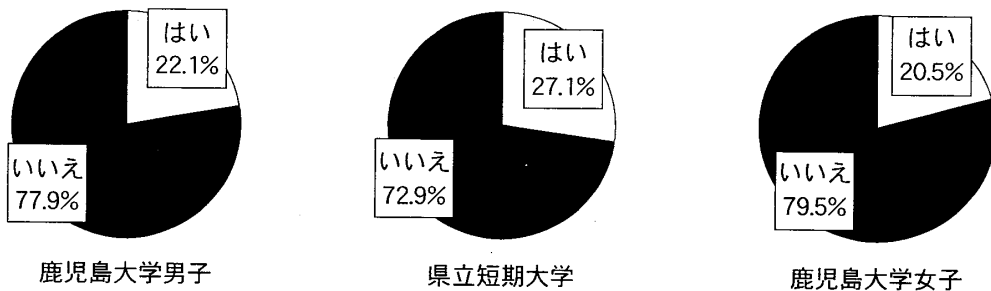
### 1. 調査結果と学生の分析

まず、学生がワークショップで報告した調査結果と分析結果は以下のようなものである。

#### Q1. 今付き合っている人はいますか？

全体的に「はい」と回答した人は県短が27.1%が一番多いが、鹿大女子が20.5%，鹿大男子も22.1%で、大学間，男女間にあまり大きな差はない。鹿大は男子学生も多く，出会いの機会が多いと思われるので，彼氏・彼女のいる人の割合は県短よりも多いと思っていた。だからこの結果は意外だった。

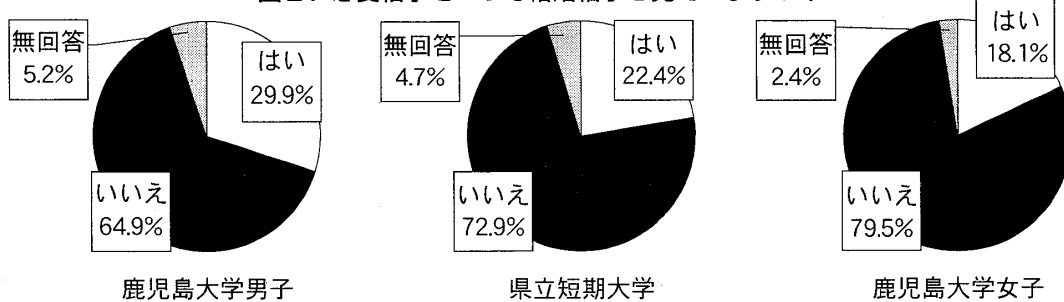
図1. 今付き合っている人はいますか



Q2. 恋愛相手をいつも結婚相手と見ていますか？

「はい」と答えたのは、女子学生は県短も鹿大も約2割だったが、鹿大男子は約3割で、男子学生の方が恋愛相手を結婚相手と見ている割合が高ことがわかる。

図2. 恋愛相手をいつも結婚相手と見ていますか？

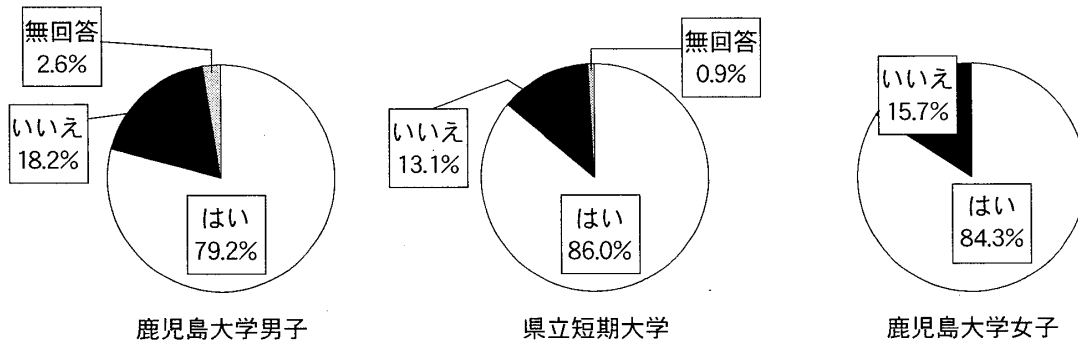


【学生の分析】女性には理想の結婚のイメージを明確に思い描いており、それを基準として現在の恋人と比較するから今回のようなデータが出たのではないかと推察される。女性の方が結婚に対して理想が高く、また妥協したくないと思っている人が多いのだと思う。

Q3. 結婚したいですか？

結婚したいという割合が全体的に見て多いが、男女で比較してみると女子が県短が86%、鹿大が84.3%に対し、鹿大男子はやや少なく79.2%だった。「いいえ」と回答した人の理由を見ると「若いから遊びたい。自由気ままを求める人間だから。お金を自由に使いたい。私生活に介入されたくない」といった理由や、「自分の父親の姿を見ると希望が持てない。よく理解できないものには手を出したくない」といった現実的な理由、「研究に専念したい」という積極的な理由もあった。

図3. 結婚したいですか？

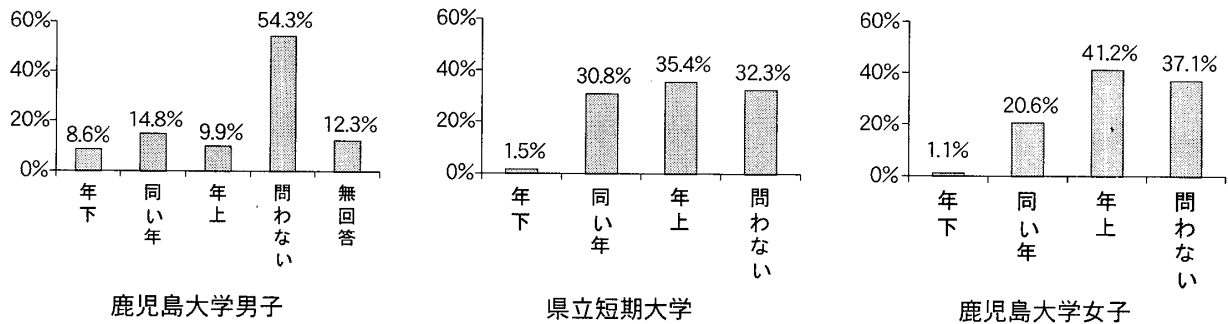


Q4. 付き合う場合・結婚する場合の条件「年齢」

(1) 付き合う場合

鹿大男子は5割以上が「問わない」で一番多く、それ以外は「同年」「年上」「年下」の順で割合はほぼ10%前後。女子の場合、鹿大・県短ともに「年上」「不問」「同年」の順番になっているが大きな偏りはない。「年上」は県短が35.4%であるのに対し鹿大女子は41.2%、「同年」は県短が30.8%に対して鹿大女子は20.6%とより多い。

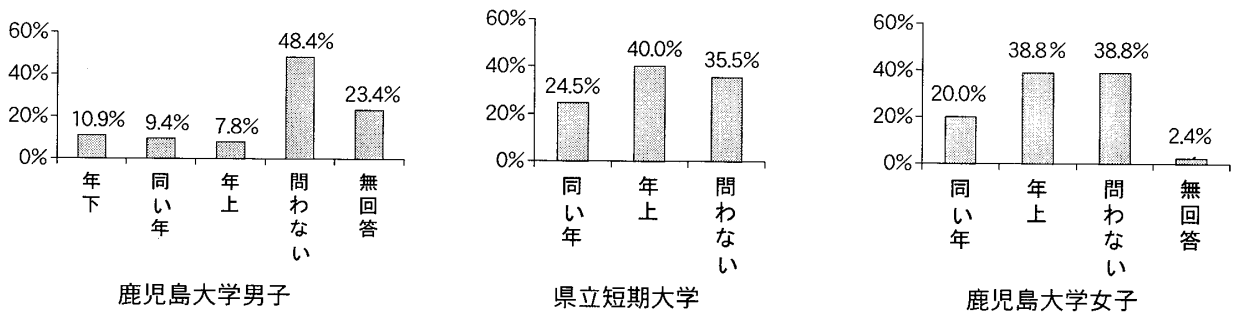
図4. 付き合う場合の条件「年齢」



(2) 結婚する場合

付き合う場合と比較すると、県短は「年上」を望む人がやや増えているが鹿大女子は「年上」は減り、「不問」が多少増えている。「年下」はどちらもゼロだった。鹿大男子は付き合う場合と比較すると「年下」の割合がやや増えたが、あまり変化はみられない。

図5. 結婚する場合の条件「年齢」

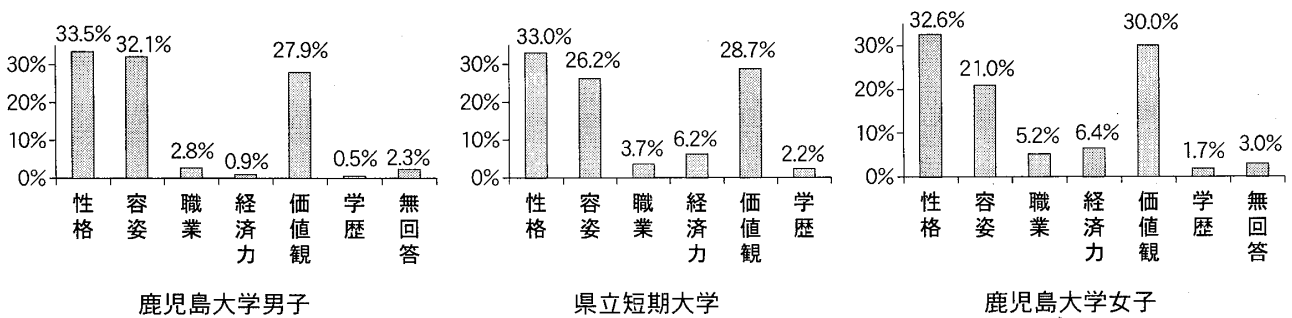


Q5. 付き合う場合・結婚する場合 優先する条件

(1) 付き合う場合

鹿大男子は「性格」「容姿」「価値観」の順で割合が高く、それ以外の選択肢を選んでいる人は殆どいない。女性は県短も鹿大も「性格」「価値観」「容姿」の順になっていて、県短はやや「容姿」が多い。女性は、この選択肢以外にも、「経済力」「職業」を撰ぶ人も少数ながら居る。

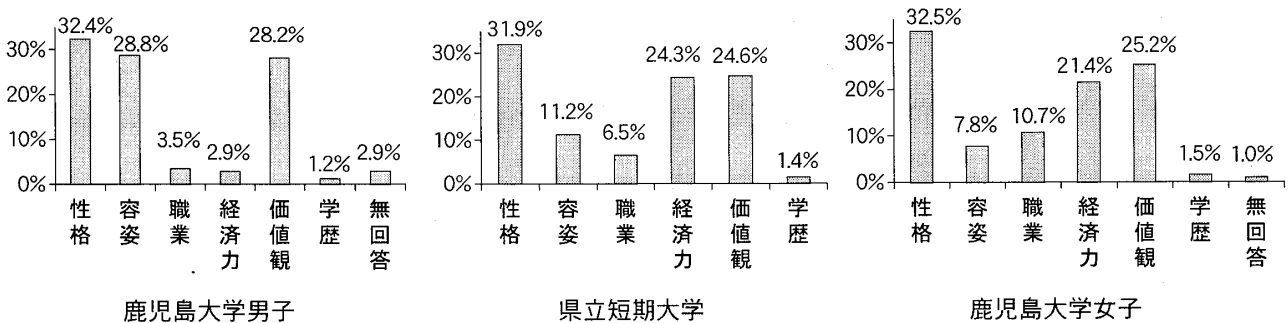
図6. 付き合う場合 優先すること（3つまで）



(2) 結婚する場合

男性は付き合う場合と同じく「性格」「容姿」「価値観」の順番で割合が高く、それ以外は殆ど選択していない。これに対し、女性は「性格」「価値観」について「経済力」の割合が高くなっており、付き合う場合の「経済力」と比べると4倍近く増えている

図7. 結婚する場合 優先すること（3つまで）



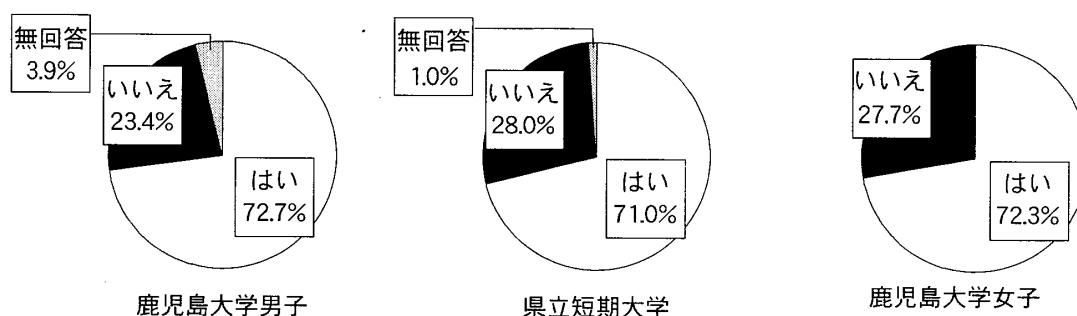
【学生の分析】結婚する場合の「年齢」の理想の質問でも、女性は「年上」が多かったが、それも一般的に年上の方が自分より経済力があると考えられているからかもしれない。鹿大男子は、自分にある程度の経済力はあると思っているので相手に経済力を求めないのかもしれない。女性は、結婚ということになると、恋愛とは違って「経済力」が大切と考える人が多く

なっている結果から、女性は生活の安定を求める傾向が強いと言えるのではないだろうか。また、男女共に「学歴」「職業」を選択する人は少なく、社会的地位よりも自分と実際の相性などを重視しているといえる。

#### Q6. 結婚式は重要だと思いますか？

「はい」と回答した人は男女とも7割程度で、その理由は、「思い出になる、結婚の実感がある、けじめ、くぎり」等。しかし、「いいえ」と回答した人の割合が男性より女性の方多く、その理由としては「面倒くさい、二人の問題である、お金がかかる、挙式は自分たちの満足と見栄でしかない」といったものだ。回答の中には「ウェディングドレスが着たい」という式に対する憧れの回答もあったが、それ以上に結婚の現実を考えた回答が特に女性に目立った。男性より女性の方が式に憧れを抱くものと予想していたので、この結果は意外だった。

図8. 結婚式は重要だと思いますか？



#### Q7. 結婚後に望むライフスタイル

##### (1) あなたが結婚後に望むライフスタイル

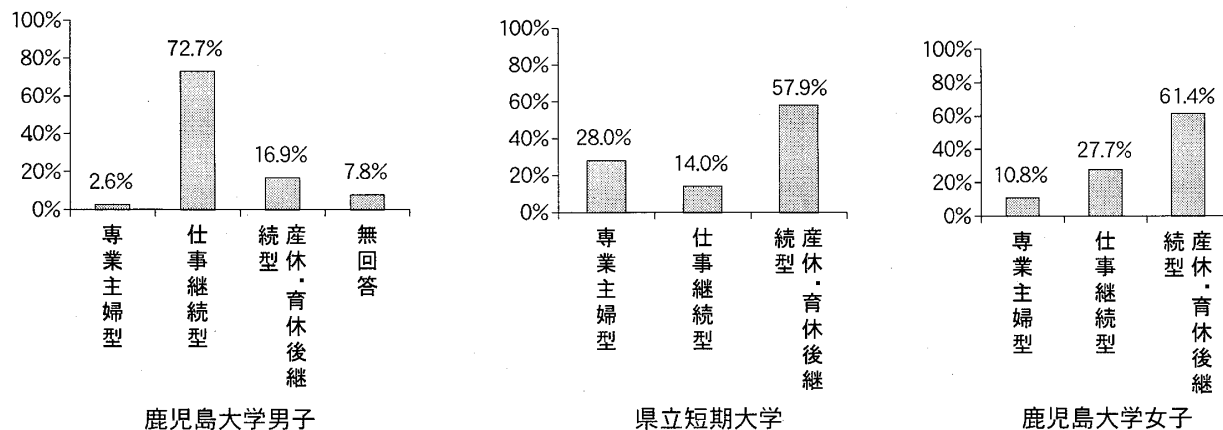
この質問では、「専業主婦(夫)型」「仕事継続型」「産休・育休後継続型」の三つの選択肢を使ったため、正確なデータとして扱うことはできない。「産休・育休」は法律上の権利として認められているため、「産休・育休後継続」は「仕事継続型」と同義でもあるからだ。したがって、回答者が「出産・育休継続型」という選択肢を「育児中断後再就職型」と解釈したのか、「産休・育児休暇をとって働き続ける」(この場合、「仕事継続型」という選択肢は「子どもは産まない」と同義になる)と解釈したのかが分からない。

このようなアンケートの欠陥を認め、ここでは「子育て優先で仕事をする時期があることを望む」といった漠然とした質問として分析してみると、女子は「出産・育休後継続型」がともに一番多いが、次に多いのは、鹿大女子が「仕事継続型」であるのに対し、県短は「専業主婦(夫)型」という、微妙な違いが出ている。鹿大女子の方が県短女子よりも仕事を継続することを望んでいる。鹿大男子は「産休・育休後継続型」が約17%、「専業主婦型」も一人いたが、7割以上が



「仕事継続型」である。

図9. あなたが結婚後に望むライフスタイルは

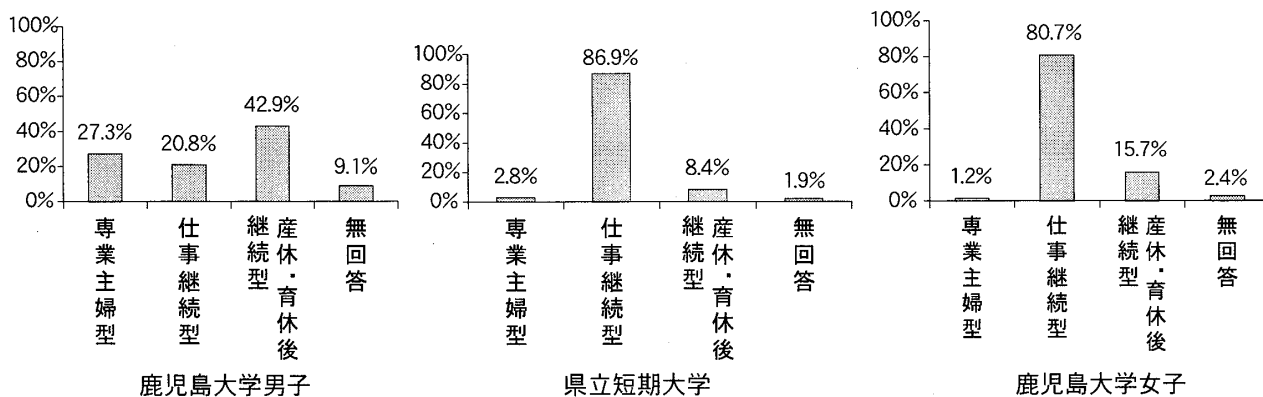


【学生の分析】県短女子よりも鹿大女子の方が仕事継続を優先的に考えている人が多いのは、鹿大が4年制大学で専攻などもはっきりと分かれており、自分の将来の夢や仕事についてははっきりとした目的意識があるからではないだろうか。

(2) 相手に望む結婚後のライフスタイル

女性の場合は、男性に「仕事継続型」を望む人が8割以上と一番多く、県短女子の方が86.7%と鹿大女子の80.7%より多い。「産休・育休継続型」を望む人もいるが、県短は1割未満、鹿大女子も15.7%と県短女子よりはやや多いが、夫と協力して分担しようという人の割合は少ないように感じた。一方、男子学生は約40%の人が妻に「産休・育休後継続型」を望み、約30%が「専業主婦型」を望んでいる。「仕事継続型」も2割以上で、「産休・育休後継続型」と合わせると6割以上になり、男性も、結婚後に妻が何らかの形で働き続けてほしいと思っている人が多いことがわかる。

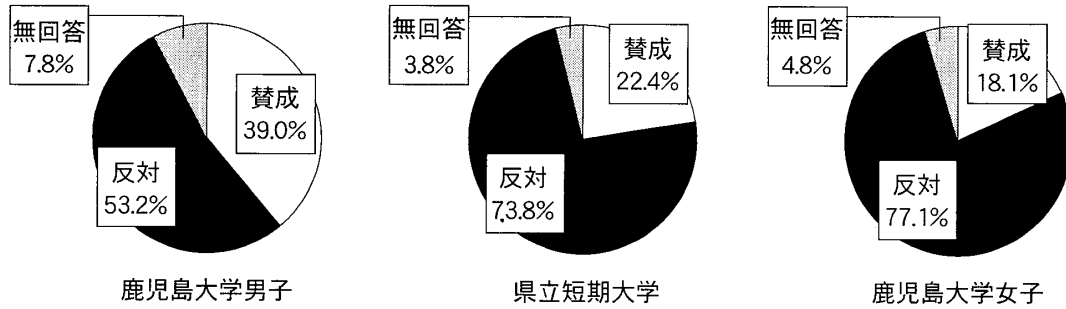
図10. 相手に望む結婚後の理想のライフスタイルは



Q8. 「男は仕事」「女は家庭」という考え方について

女性は7割以上、特に鹿大女子は8割近い人が「反対」しているが、鹿大男子の反対は53.2%にとどまっている。一方で「賛成」は女性が2割だが男性は約4割と、その意識に差があることが分かった。

図11. 「男は仕事」「女は家庭」という考え方について

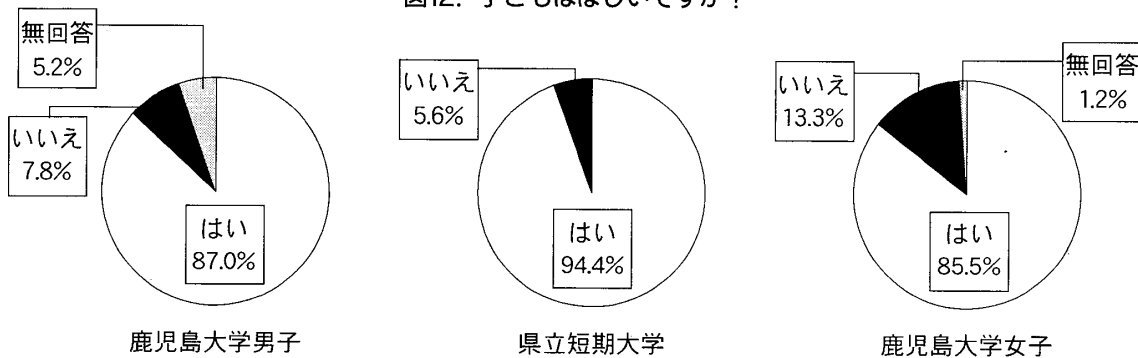


【学生の分析】 鹿大男子が恋人や結婚で相手に経済力を求めなかったのは、「男は仕事」「女は家庭」という考え方を持っていて、経済力は自分自身に必要なもので、相手に求めるものではないと思っているためではないか。

Q9. 子どもはほしいですか？

鹿大男子は87%，県短は94.4%，鹿大女子は85.5%の人が「はい」と回答し、ほとんどの人が子どもはほしいと思っており、その割合はQ2の「結婚したい」の割合よりも多い。子どもはほしくないという人は鹿大女子が県短よりやや多かった。ほしくない理由を尋ねると、「特にほしくないとは思わない。子どもが嫌い。自分に似た子になっていや。育児・教育が大変そう」などの記述があったが、「いいえ」の割合が少し高かった鹿大女子の理由の中には「仕事に打ち込みたい、自分がしたいことを優先したい」という記述もあった。

図12. 子どもはほしいですか？



【学生の分析】「いいえ」の回答と理由に現れた県短と鹿大女子の違いは、Q 8でも分析したように、鹿大女子が、自分の将来の仕事に対してわりとはっきりとした方向性を持っているという分析を裏付けていると思う。

Q10. 子どもは何人ほしいですか（男と女それぞれ）

県短、鹿大女子、鹿大男子ともに子どもの数は男と女一人ずつ合計で2人という回答がめだつた。鹿大男子の中には合計4人という人も1割、3人ほしいという人も3割以上で鹿大女子より多い。子どもができれば性別は関係ないのか、それとも自分とは異なる性別の子どものイメージがないのかはわからないが、男女共に、自分と同じ性別を撰ぶ人の割合の方が、自分と違う性別を撰ぶ人よりも多い傾向にある。

図13. 子どもは何人ほしいですか（男の子）

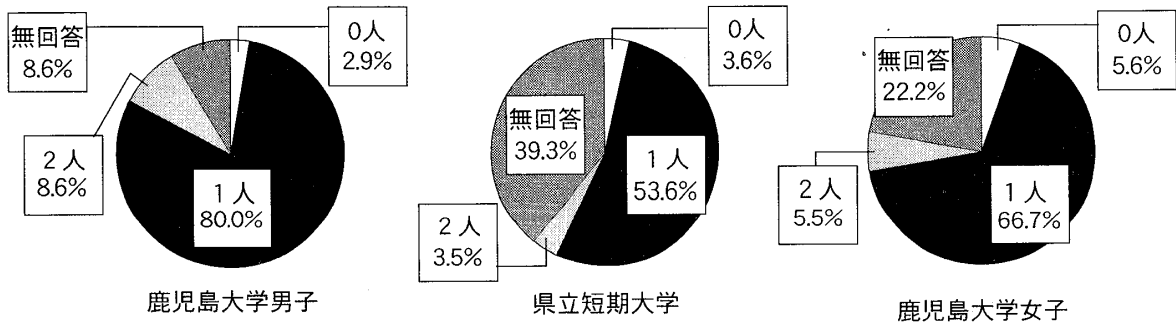


図14. 子どもは何人ほしいですか（女の子）

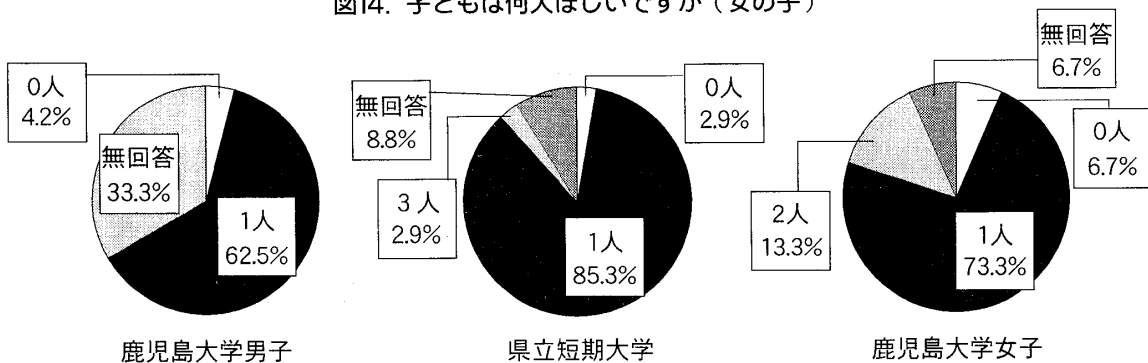
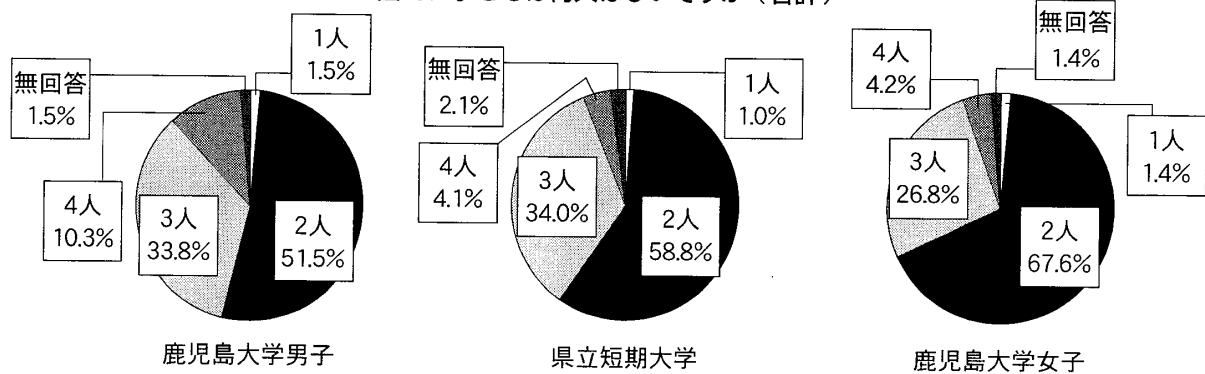


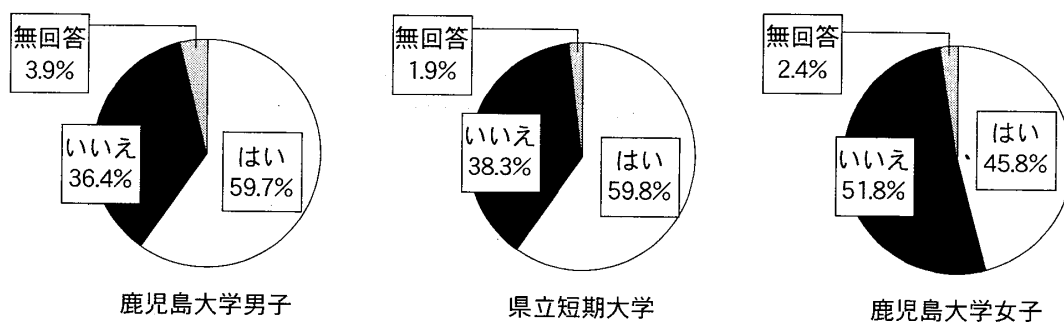
図15. 子どもは何人ほしいですか (合計)



Q11. 結婚は幸福の条件だと思いますか？

県短と鹿大男子はともに約6割の人が「はい」と回答しているが、鹿大女子は45.8%と5割に達していない。これに対し「いいえ」と回答した人の割合は、県短38.3%、鹿大男子36.4%とともに4割に満たないのに対し、鹿大女子は5割を超えている。また、結婚のメリット、デメリットを聞いてみたところ、メリットとしては「温かい家庭が憧れ」といった精神的なものを求める回答と「経済的安定、老後の安心」という現実的な回答に二分され、デメリットは、「自分の時間が減る」が一番多く、その次は「人間関係の複雑さ」といったもの、「いいえ」の回答が多かった鹿大女子の中には「自分の仕事が続けられなくなる、行動が制限される」といった回答があった。また、女性の中には「相手への思いが続かなくなるだろう」という冷静な分析をしているものもあった。

図16. 結婚は幸福の条件だと思いますか？



【学生の分析】 女性の方が男性より明確で現実的な結婚に対するイメージを抱いているようだ。

そして、その結婚の理想は、理解のある相手とある程度裕福な暮らしをしたいというもので、精神的にも経済的にも「安定した暮らし」が理想ということのようだ。そのために女性は経済力など生活に必要なものを優先する傾向にある。男性は、恋愛の延長に結婚があると考える人が多いので、女性が経済的なものも含む生活の豊かさや安定を望むのとは違い、結婚は

恋愛と同様に楽しむもの（楽しめるもの）と考えられている。だから「結婚は幸福の条件だ」と回答する人も多かったのではないだろうか。

## 2. ワークショップ参加者の反応

以上のような学生の報告に対し、ワークショップ参加者33名が二つのグループに分かれ、学生も入って議論を行った。参加者は性別、年齢、職業も多様で、行政の男女共同参画担当者や市会議員、教員、主婦など、様々な立場から発言があった。全体的に参加者は、入学後間もない学生の初めてのワークショップであることを寛容に受け止め、しかし、学生の問題意識がどこにあるのかという戸惑いもあって、学生に対する質問が多かった。

プレゼンテーションの内容と学生に対する質問、感想、意見は以下のようなものである。

### 〔質問〕

- ・アンケート対象は、同じ年齢、学年の学生か？出身は鹿児島県内だけか。
- ・結婚と子どもの存在を前提にした「理想のライフコース」というのは、「実現可能な理想」なのか、それとも夢に近いような「理想」そのものなのか。
- ・幸福の定義がまず必要だったのではないか。
- ・「結婚」という場合、「法律婚」や「事実婚」など様々なバリエーションがある。その違いを前提にして質問してもよかったのではないか。
- ・女性が結婚するとき相手の「経済力」を優先するのに対し、男性は女性の「経済力」はほとんど問題にしていない。これを鹿大の男子学生は自分にある程度の経済力があるからと分析していたが、男子学生も女性に「仕事を継続してほしい」と望む割合は高い。この結果は、男子学生も生活に「経済的な豊かさ」も求めているということにはならないか。
- ・恋愛や結婚で優先することの選択肢の「価値観」とはどのようなことをさすのか？趣味が一緒、波長が合うということか。
- ・「産休・育休継続型」というのは「仕事継続型」と同じではないか。

### 〔アンケート結果の感想や経験に基づく意見〕

- ・20歳前後の若い学生が対象なのに、「今付き合っている人がいる」のが男女とも20%程度しかいないというのは驚き。もっと多くてもいいはず。
- ・若い人でも男性には男女平等の意識がまだ浸透していないのだと思った。
- ・男性に求める理想像が高い、これほど非正規雇用が多い中、二人で働かなければやっていけないのが現実ではないか。
- ・男性と協力して家事をするというのが若い人たちの理想で多いが、現実には難しい。
- ・仕事をしていても、女性は「家庭や地域」に関わりが深いのが、男性はほとんど関わっておらず、退職後に関わろうとするが、それは女性にとって自分の領域を犯されたような気になって熟年離婚するケースが出てくる。
- ・男性は結婚に対する意識は低いのが、老後の生活に対する不安はある。一人では生活していけな

い。

- ・25歳が女の適齢期とされる私たちの時代も、同じような理想をもっていた。今の若い人の意識は私たちの時代と全然変わっていない。だけど、そうして結婚して出産して、どれだけ辛い・大変な思いをしてきたか。
- ・自分で結婚相手を選べる時代というのは幸せ。しかし、逆に選択が難しいということでもあるのでは。
- ・親の意識も変わって、個人の生き方が尊重されるようになった。しかし、それは「子どもに同じような苦勞をさせたくない」という、特に女性の意識が制度に結びついた側面が強い。
- ・「仕事継続型」が理想とされているが、現実には妻の職場復帰は難しい。
- ・女性が「経済力」を気にするというのも分かる気がする。「共働き」というのは確かに収入の単純合計は多くなるかもしれないが、専業主婦の人にとっては無駄と思えるような出費もある。そういう無駄も許容できる収入があるかどうかは、自分が担わざるを得ない家事・育児の負担や質に関わってくる。
- ・専業主婦をしたいと思い家庭に入ったが、やはり仕事をしたいと思った。
- ・大学に入っても「何になりたいか」という理想がない。ノルウェーなどを見ていると、男であろうと女であろうと人として働くのは当たり前で、大臣になる女性たちも沢山いる。社会の一員として「働くこと」の意味を、単に経済的な問題だけとして捉えるのではなくて、もっと教育の場で教えるべきではないか。

### 3. 学生の感想

ワークショップ終了後の全体会議の中で、学生がワークショップの報告と学生自身の感想を発表した。その発表によると、ワークショップに参加した学生にとって特に印象に残ったのは、付き合い合っている人がいるという学生が全体の20%程度であることに驚かれたということ、男子学生と女子学生の意識の違いについて学生自身の意見を求められ、具体的に幸せとは何かという質問をされて答えに窮したこと、これほど年齢も職業も多様な人たちと話をしたのは初めてだったことなどだったという。そして、自分たちでは発見できなかったような問題点をつきつけられたこと、様々な世代の人々の実体験を交えての質問や意見に、恋愛や結婚に対する意識がその時代背景によって確かに変化するものであり、今の時代は「結婚を自由に選ぶことができるから幸せであり、また困難でもあるのだ」ということに改めて気づかされた、という感想で結ばれていた。

参加者の質問の中には、理想のライフコースというのが「実現可能な理想」なのか、それとも「夢に近いような理想」なのかといった核心をつくような質問もあった。この質問に対して、学生は「夢に近いような理想である」と一応答えていたが、本当のところはどうなのだろう。本当に現代が、結婚し子ども2人が居る家庭が実現が困難な理想になった時代だと映っているのか。あるいは、女子学生は「夢」や「理想」も現実的に考えるように刷り込まれているということなのだろうか。

### Ⅲ 調査に対する考察

ワークショップなどの反応や、その後得た情報などをもとに、この調査結果に多少の考察を加えてみたい。

#### (1) 恋愛よりも将来への不安や迷い

まず、驚きの声があがった「彼氏・彼女のいる学生が20%程度」という結果について。前述した立命館大学の調査でも「現在、彼氏・彼女がいるか」という質問があり、(男女別のデータはないが)彼氏・彼女がいるのは36%で64%が「いない」と回答している。この割合も高いとはいえないが、これに比べても鹿大と県短の割合は低い。鹿大女子が県短女子よりも少ないことを考えると、出会うチャンスがないからということでもないようだ。Q2の「恋愛相手をいつも結婚相手とみているか」という質問に対し、圧倒的多数の学生が「いいえ」と答えていることから、貞操観といったようなものにとらわれているわけでもないだろう。

2005年に十文字学園女子大学・社会情報学部・社会情報学科の星野ゼミの学生が卒業研究でおこなった「大学生の恋愛・結婚に対する実態意識調査」<sup>2)</sup>によると、女子大生の40%が「今は恋愛より熱中するものがある」と答え、62%が「男の人と付き合うのが面倒だと思ったことがある」と答えている。男女間のジェンダー意識に格差があるということだろう。また、県短の学生たちは、恋愛より熱中するものがあり充実した学生生活を送っているのか、であれば恋愛より熱中しているものとはどのようなことなのだろう。

ちなみに、学生生活実態調査報告書『CAMPUS LIFE DATA 2007』によると、大学生生活の重点を尋ねると「勉強第一」との回答が25.1%で最も多く、「日常気にかかっていること」は、「授業」「就職」「生活やお金」「生きがい」「自分の性格・能力」の順で、「ガール(ボーイ)フレンドや異性のこと」はベスト5にも入っていない。将来への不安や迷いが恋愛観にも影響しているとも考えられる。

#### (2) 性別役割分業観と自由・平等の折り合い

恋愛の場合、容姿は女子学生にとっても重要な条件ではある。しかし、男子学生が結婚を恋愛の延長と考えているのに対し、女子学生は恋愛と結婚を多少違うものと意識している。結婚が男女の対等な人格的結びつきであるという理念を反映して、「性格」や「価値観」といった項目を選択している学生が男女とも多いが、その陰で、女子学生が夫に「経済力(有能な稼ぎ手であること)」を、男子学生は妻に「容姿(見目美しさ)」を求めており、性別役割分業観を反映したジェンダーによる偏りは依然としてあることがわかる。

男子学生の6割が、結婚相手に「経済力」を優先的条件としていないにもかかわらず、妻にも働き続けてほしいと思っている理由について、参加者からも質問があった。これに対しては、

<sup>2)</sup> 十文字学園女子大学・社会情報学部・社会情報学科・星野ゼミ卒業研究『大学生の恋愛・結婚に対する実態意識調査』。この卒業研究では、酒井順子『負け犬の遠吠え』の「負け犬」というカテゴリーに注目し、「負け犬予備軍」と「勝ち犬予備軍」という分類を行い、それぞれによって恋愛観・結婚観の意識の違いを調査している。

「結婚したいですか」の質問に「いいえ」と回答した人が、「自由にお金を使いたい」「自由気ままにしたい」という理由をあげていたことから、男性は主たる生活維持者として経済力を求められていることを自覚しつつ、「個人的に使える自由なお金」を確保したいと思う人が多いと学生は分析していた。確かに、20代の若者の結婚行動が鈍い理由として、親の庇護下の結婚モラトリアムの居心地のよさが指摘され、世論調査でも「独身生活の自由」が男女ともに1位としてあげられている。つまり、一定の年齢になれば親の家計を助けた以前とは異なり、今日ではほとんどの未婚者は親や弟妹の扶養を引き受けることもなく、社会に出ても収入は自分のもので、時間もお金も自由に裁量している。

したがって、男子学生にとって、結婚するからには自らが家計の主たる維持者になるのだろうという自覚があるが、こずかい制のような管理はごめん「自分の自由に使えるお金は確保したい」、あるいは、妻も「個人的に使いたいお金くらいは自己責任で確保してほしい」ということなのではないだろうか。

お互いが望む結婚後のライフスタイルを男女ですり合わせてみると、27.3%が妻に専業主婦を望む鹿大男子と、28%が専業主婦を希望している県短女子とは、10.8%しか専業主婦を望んでいない鹿大女子よりはライフスタイルがマッチするかもしれない。しかし、それは男子学生の生活環境がどうであるのか、親の庇護下で自由でリッチな独身生活を満喫したかどうかということによっても左右される。

### (3) 同質で安定的・親密な関係

ところで、アンケート作成の際に「結婚する場合に優先する条件」の選択肢として「愛情」も加えてみることを私は提案した。しかし、学生からは却下されたので、その理由を後で聞いてみると、「愛情」があることは当たり前だからということだった。つまり、男子学生より結婚を現実的に考えながらも、それは愛情よりも金、結婚は生活保障といった現実主義ではない。

ただし、「愛があれば乗り越えられる」といった結婚観も想定外なのかもしれない。当然の前提となっている「愛情」も、恋愛のような強い誘引力のある「性愛」というより、性格や価値観が合うような「同質」でだからこそ「安定」的な関係性であるようだ。もともとは他人同士の「結婚」を望む割合よりも、「子ども」という血縁のつながりを望む割合が多いという結果からも、このことは読み取れるのではないだろうか。

### (4) 結婚は「できればしたい」選択肢

そして、「結婚は幸福の条件か」というテーマに対しては、男女間というより、鹿大女子と県短女子の間に違いが出た。どちらも「結婚したい」という志向性はもちつつも、結婚と仕事の優先順位は異なる。鹿大の女子学生の方が、結婚と出産（とくに出産）に伴うリスクをより痛切に感じているようだ。

こうした違いがありつつも、今の学生にとって結婚は幸福の絶対条件として「したいもの」と言い切ることもできないことは確かなようだ。



## おわりに

ワークショップ終了後に、参加者の一人から「学生の生の声を聞いて面白かった」という感想とともに、女子大生の就職活動をめぐる新聞記事が添付ファイルで送られてきた。

その記事によると、「最近の若者は・・・」といった社会人と学生の間にある境界線は、「働くこと」に対する意識のズレによるものではないかということだった。

雑誌やネットで「ワークライフ・バランス」や「ダイバーシティ」という言葉をよく見かけるようになったが、女子学生たちが「仕事と家庭の両立を考えることはあたりまえなんだ」と思って、OG訪問のときに「育児休暇制度の利用率」や「女性の既婚率」を質問すると、既に働いているOGは「今どきの学生は仕事の内容には興味ないの!」「やる気がないの?」とってしまうという。ところが女子学生にとってみれば、男子学生が同席している会社訪問ではそのような質問はできないから、同性だけの場でそのような質問ばかりをしてしまうのだ。つまり、結婚や出産が人生にとって重大事であれば当然質問したいことを、素直に言葉に出せない就職活動の現実があるということだ。そして「結婚、出産についての質問」=「働く意欲がない証」という発想は、会社の幹部や男性社員ばかりでなく、現実を既に受け入れ企業に同化している先輩の女性たちも同じ。これが、学生たちの直面している現実でもあるのだ。

ワークショップを開くことで、こうした情報提供があったことも大きな収穫だった。多くの学生にとって結婚や出産が「人生にとって重大事」であり続けていることは確かだが、それを、「今の若い人の意識は私たちの時代と全然変わっていない」と嘆くとしたら、それも社会人と学生との境界線を形作っている意識のズレの所産なのかもしれない。「ジェンダーという言葉を知らずに飛んで傷ついた世代」と、何らかの形でジェンダー構造を教えられ「無謀には飛べなくなってしまった世代」との境界線と言えるかもしれない。

女性の生き方に、よりよく生きるために「あえて結婚しない」という選択肢が加わり、独身女性の存在も目立つようになってきた現在。これから生き方を問われる学生にとって、結婚はもはや「すべきもの」とは意識されていないが、「しなくても構わない」とも言えない。幸福の絶対条件として「したいもの」と言い切ることもできない。いわば「できればしたいもの」という選択肢なのではないかと思う。

## 参考文献

内閣府編『平成17年版国民生活白書 子育て世代の意識と生活』（国立印刷局）

岩山真珠著『ライフコースとジェンダーで読む 家族 [改訂版]』（有斐閣）2007.10.20

山田昌弘・白河桃子『「婚活」時代』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）2008.3.1

第43回 学生の消費生活に関する実態調査報告書『CAMPUS LIFE DATA 2007』（全国大学生生活協同組合連合会）

“特集 だから女は働かない 見せかけ「女性活用の落とし穴」『日経ビジネス』2008.3.10

十文字学園女子大学社会情報学部・社会情報学科・星野ゼミ卒業研究『大学生の恋愛・結婚に対する実態

意識調査』 ([www.jumonji-u.ac.jp/sscs/hoshinoa/2005/renai.pdf](http://www.jumonji-u.ac.jp/sscs/hoshinoa/2005/renai.pdf))

(2008年10月1日 受理)